

平成 25 年度日本 ICID 協会講演会の開催

JAICAF 西牧会長「アフリカの農業開発と稲作振興」

日本 ICID 協会は、平成 25 年 12 月 6 日（金）農業土木会館にて、（公社）国際農林業協働協会会長西牧隆壯氏を講師にお迎えし、「アフリカの農業開発と稲作振興」をテーマに講演会を開催いたしました。

冒頭太田会長より、アフリカで実践を行ってこられた西牧会長を講師にお迎えしたことと、2016 年の韓国での世界水フォーラムにおいて、灌漑に関して目に見える施設と同じく重要な人や組織といった目に見えないものについて評価する世界水管理遺産（仮称）として、日本より世界水会議の中で情報発信を行うことが考えられている旨の紹介の後、講演に入りました。

講演は、アフリカの気候・降水量に適応した農業形態の概要、乾燥地帯での灌漑と農業の実態、砂漠化の防止、降雨地帯での米農業への協力及びネリカ米等について行われ、概要は以下の通りです。

アフリカの農業は、降水量 200mm 以下のオアシス農業と山羊、ヒツジ飼育、300~600mm 間の放牧主体でミレット、ソルガム栽培、600~800mm 間の舎飼い畜産とトウモロコシ、豆栽培、800mm 以上のトウモロコシ、コメ、イモ、コーヒー、カカオ、花卉、野菜、果樹等栽培の 4 種に分類できる。

乾燥地での灌漑農業として、モロッコのハッターラ（地下水路）を水源とするオアシス農業について、高木のアブラヤシ、低木のオリーブ等果樹、小麦、野菜、牧草等の畑作物を組み合わせる生態系を形成して継続的に行う農業がある。また、水路の漏水問題がありパイプによる施設の改善等を図る必要がある。

砂漠化防止として、マリ国セグー地方での協力の例から、時間はかかるものの住民自身が砂漠化の問題や課題を把握して、過剰な耕作、放牧、伐採に対応することや植林、生活での薪利用の効率化を図ることが重要である。

アフリカの 2/3 を占める乾燥から半乾燥地帯での農業をどのようにしていくかが問題である一方、降雨地帯でどのような農業を展開するのか、アフリカで消費が伸び需給ギャップが増大しているコメ、コムギへの対応が課題である。これに対し、小麦はアフリカの気温が障害となり生産量の増大が困難なことと、コメは水さえあればアフリカで相当の収量が見込めること、自家消費ではなく販売作物として農家に現金収入をもたらすことなどから、日本がコメの生産に協力することが適当で、農業適地での選択作物としてコメを対象に、大規模開発、小規模灌漑稲作開発、総合的稲作普及（陸稲ネリカ、小規模灌漑、水利組合強化、マーケットアクセス改善等）へと協力が進められてきた経緯があり、近年ではメンテナンスやマーケットアクセス等の課題への対応が重要になっている。

日本も協力を進めているネリカ米については、陸稲ネリカの特質や優位性とウガンダでの普及事例を含めアフリカ各地へ栽培が広がる可能性がある。

ウガンダでは主食として青バナナ、トウモロコシ、コメ、ジャガイモ、キャッサバ等多くのものが食されており、これが一つの農業体系となる。

講演には多くの ICID 協会会員が参加し、アフリカの灌漑農業開発への関心の高さを伺わせ、講演後の質疑も活発に行われました。

（日本 ICID 協会事務局）

（お知らせ）

本講演会のテキスト等に多少余部がございますので、配布をご希望の会員は事務局までご連絡ください。



西牧会長の講演



講演会の様子